施設出た子たちに希望の職を

岩出の支援協会が企業と結ぶ新事業

一般社団法人の児童養護施設支援協会（岩出市）が、これから社会人として歩みだす子どもたちと、働き手を求めている企業とを結ぶマッチング事業「MKB（まきば）プロジェクト」を始めた。

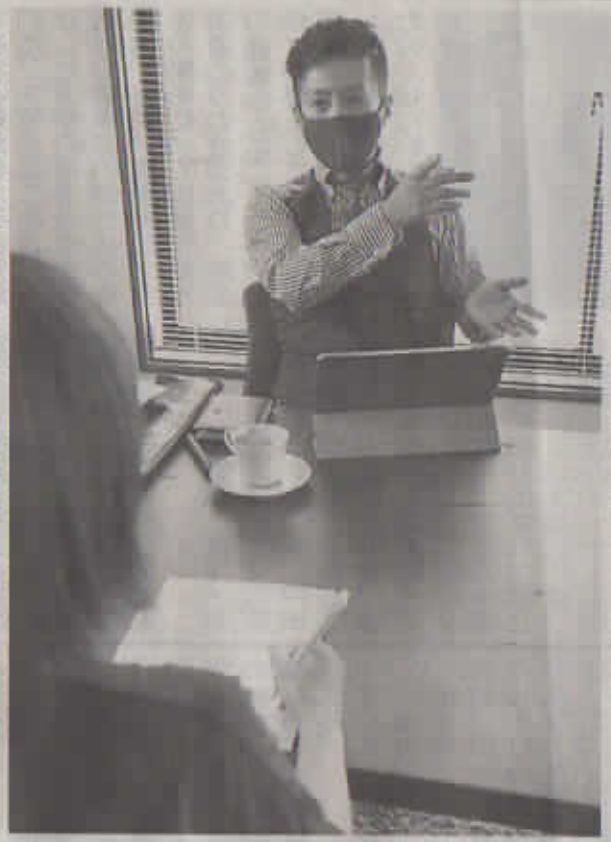
支援協会の理事長(48)は会社の経営者でもある。施設の子どもたちが「入るまえ」も「出たあと」も厳しい状況にあると知ったのは10年前。以来、施設や小学校を回ってITリテラシーや一般教養を教えて、羽ばたく準備を支援してきた。

見えてきたのが施設を出たあとのケアのなさだ。施設で暮らせるのは原則18歳まで。その後は、進学でも就職でも一気に「自己責任」を迫られるのが現状だ。その結果、望まない職に就いてなじめずに孤独に陥ることもある。

そこで昨年7月、支援協会を設立。施設を出たり保護者と暮らせなかったりする15～20歳が生活する自立援助ホームも開いた。さらに、「子どもたちの『やりたい仕事』を大切にしたい」とも考えて始めたのが「まきば」で、ま（学んで）、き（希望する）、ば（場所＝職場）の意味を込めた。支援協会は寮を用意したり私生活のケアをしたりして支える役割を担う。

理事長は「子どもたちは18歳になると頼る人も援助もないまま社会に放りだされる。それを社会の大人が知らんふりしていていいのでしょうか」と話す。

事業に賛同して採用に積極的な企業を募っている。電話（0120・410・405）やホームページ（https://www.jidouyougo.com/）の問い合わせ欄へ。相談先に困っている子どもからの連絡も待っている。（下地毅）



子どもたちへの接し方について話し合う自立援助ホーム「ゆるりのまきば」の職員会議。女性（左）は児童養護施設の出身者だ＝いずれも和歌山市

「私も育った」26歳寮母、心配る日々

児童養護施設を出た子や保護者と暮らせない17～19歳の3人の女性が共同生活をおくる自立援助ホームが和歌山市にある。

寮母は2週間に1回、ドーナツを食べながらの「おしゃべり会」を開き、月1回の面談も重ねている。もっとも心を配るのは日々の会話だ。

ここを20歳で出たあとはどうするの。「そういえばさあ……」というつぶやきに耳をすます。

ここではお母さんって感じで、掃除して洗濯して。子どもたちとわいわい話す中から将来のことが漏れてくるから、それが提案の手がかりになる。自立するために今なにを身につけておくべきか。これからどうするのか。いっしょに考える。口の利き方も本人は「それでいい」と言うけれど、社会に出て困るからどうにかしてあげたい。

ここの子どもたちは親と暮らしていないので相談する人がいない。「いるよ」と言うけれど、もしかしたら誰に相談していいのかわからないのかもしれない。相談していいんだよ、信頼していいんだよということを行動で示したいと思う。

寮母は26歳。「こんなことを考えるのは、私が児童養護施設で育ったことが大きいのかな」と言った。

保護されたのは3歳のころだ。理由は知らない。聞いたのは、両親の「けんか」が激しくて近所の人が通報したことぐらいだ。

児童養護施設が記憶の始まりです。どこかに「ふつうと違う」という感覚がありました。施設にいることを知られたくないというのか恥ずかしいというのか。「ふつう」は、お父さんとお母さんがいて……となるだろうけれど、これもテレビで見た「ふつう」であって、それと自分が違うことはわかるんだけれど、なにが「ふつう」かは今もはっきりわかっていない。

高校生になると「いてにくさ（居場所のなさ）」を感じるようになって不登校になりました。そのころの施設は携帯電話の所有を禁じていて、すると友だちと連絡先の交換や遊びの約束ができないハブられるようになって、ひとりぼっちになると悲しくなるから「人と関わらないでおこう」と決めて活はもう少しでやめるところだった。

高校を卒業して、保育士になるために就いた。保育士にあったけれど、ら奨学金をもわからなかった。「挑戦しろ」になかった。て、「じゃ20歳で出な」という仕事はお症でも私のりがいだっかれさまでも人間し、介護のを踏み出しようになり言えなくて暮らしとな

直後の2会（岩出市所したホーかった選択願う。

私も自分を開いてく打ちあけてともある。

ひとり暮の使い方をいポツンと分の責任に

自分の子かわいい！のはよかっど、もっと

と考えるこ

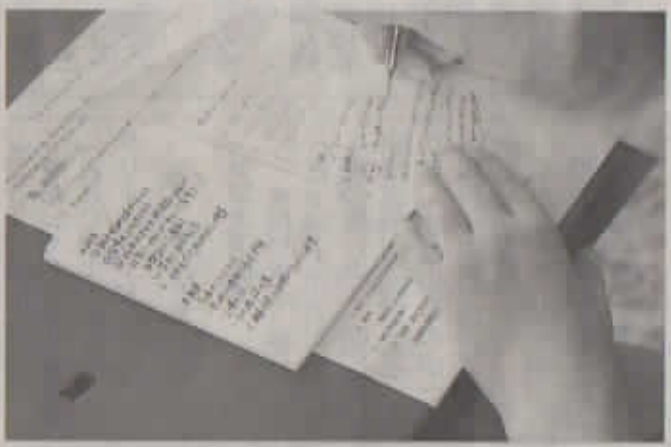
退所後も思ってくれ。子ども思ってもら

い。毎日毎

ういう存在

今の社会、もう少し多

いいなと思



「今後のことについて」「仕事のこと」「その他悩み等」。自立援助ホーム「ゆるりのまきば」で働く女性は、子どもたちへの援助方針をメモに書いていく